地域へ、全国へ、そして
未来へつなげる熊本県の防災教育

学校防災教育
指導の手引

熊本県教育委員会

はじめに

県内各地に未曾有の被害をもたらしました平成 28 年熊本地震からまもなく２年が過ぎようとしています。熊本地震の爪痕は大きく、現在も「創造的復興(Build Back Better)」を合言葉に県民皆で力を合わせて復旧・復興に向けて取り組んでいるところです。

震度７が２回の激震や長期間にわたり継続する強い余震等、平成 28 年４月 14 日以降に発生した一連の地震は、死者 246 人、重軽傷者 2,718 人、住居全壊 8,649 棟（平成 29 年 10 月 13 日現在）等、県内各地に甚大な被害を与えました。

想定を超える大規模地震の中、児童生徒等は周囲の状況を自ら判断し、命を守る行動を自らでとる必要がありました。また、学校においては、児童生徒等の安否確認や避難所協力、施設設備の安全確保など、今まで経験したことのない様々な対応に戸惑いながらも、教職員による誠心誠意の対応や各地から、多くの方々の御支援のおかげで、平成 28 年５月 11 日までに全ての学校を再開することができました。

このような経験を通して、過去の災害の経験を語り継ぎ、日頃から防災意識を高めておくことの大切さや地域と顔の見える関係をつくっておくことが、災害発生時の「共助」につながるなど貴重な学びを得ることができました。

また、各地からの御支援や、主体的にボランティア活動に取り組む児童生徒等の姿は、我々に前を向く力を与えてくれたことも忘れてはなりません。

今回、このような貴重な学びを地域へ、全国へ、そして未来へつなげ、「自助」、「共助」のために主体的に行動できる児童生徒等を育成することを目的に本手引を作成しました。

防災教育の充実を図るためには、家庭、地域及び関係機関との連携を図りながら、地域の特性や児童生徒等の実態に応じて、各教科等横断的な視点を持ち、内容のつながりを整理しながら計画的に進めていくことが重要です。

そこで、本手引に示している内容を学校安全計画に位置付け、組織的かつ計画的に活用していただくことを期待しています。

終わりに、本手引の作成に当たり、御尽力いただきました作成委員をはじめ関係各位に対しまして深く感謝申し上げます。

平成 30 年３月

熊本県教育委員会

目　　次

「学校防災教育指導の手引」の活用に当たって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1　平成 28 年（2016 年）熊本地震を語り継ぐ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

2　自然災害を学ぶ

（１）地震・津波災害を学ぶ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
（２）風水害を学ぶ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
（３）火山災害を学ぶ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
（４）過去に熊本県で発生した主な自然災害を学ぶ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

3　いつでも、どこでも、将来も、自分の命を守り抜く【自助】

【幼稚園・小学校低学年展開例】
（１）カードで学ぼう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
【小学校１年～３学年展開例】
（１）地震災害から身を守る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
（２）津波災害から身を守る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
（３）風水害から身を守る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
（４）火山災害から身を守る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
【小学校４年～６学年展開例】
（１）非常持ち出し袋を作ろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
（２）防災マップを見てみよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
（３）我が家の防災対策をしよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
【中学校・高等学校展開例】
（１）地震・津波災害に備える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
（２）風水害に備える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
（３）火山災害に備える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

4　助けあい、励ましあい、志高く【共助】

【小学校１年～３学年展開例】
（１）避難所生活で大切なこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
【小学校４年～６学年展開例】
（１）避難所生活で私たちができること・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
【中学校・高等学校展開例】
（１）安全なまちづくりへの参加・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
（２）避難所ケース学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
（３）避難所運営ラーニング・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80

5　実践的避難訓練計画例

（１）緊急地震速報を活用した避難訓練計画例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
（２）引き渡し訓練計画例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
（３）登下校時の避難訓練計画例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
（４）地域と連携した避難訓練計画例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93

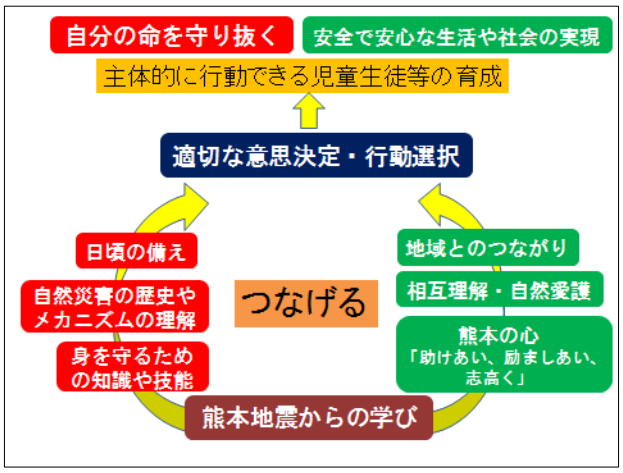
「学校防災教育指導の手引」の活用に当たって

児童生徒等に身に付けさせたい力

平成 28 年熊本地震では、過去の大規模地震の経験が語り継がれておらず、地震への危機意識が薄れていたという課題があった一方、命の尊さや助け合うこと、支え合うことの大切さ、地域とのつながりの重要性など貴重な学びを得ることができました。

この経験を生かし、本手引では児童生徒等が自然災害や地域への理解を深め、今後も想定される様々な自然災害に対し、「自助」「共助」のために主体的に行動する態度を育成することを目指しています。

【イメージ図】



本手引の構成内容

本手引は、以下のような内容で構成しています。幼稚園児及び特別支援学校、特別支援学級の児童生徒については、実態に応じ内容を選択して活用してください。

1　平成 28 年（2016 年）熊本地震を語り継ぐ

平成 28 年熊本地震の概要や児童生徒のボランティア活動、学校再開の様子等を示しています。授業の導入や短学活（SHR）等で活用してください。

2　自然災害を学ぶ

自然災害（地震・津波、風水害、火山災害）の歴史やメカニズム等についてまとめています。授業の導入や短学活（SHR）等で活用してください。

3　いつでも、どこでも、将来も、自分の命を守り抜く【自助】

日頃から身の周りの危険な環境を改善するなどの備えを行うとともに、自然災害発生時に、命を守り抜くために主体的に行動する態度を育成することを目的とした指導展開例を「小学校１年～３年」「小学校４年～６年」「中学校・高等学校」の発達段階に応じて作成しています。

4　助けあい、励ましあい、志高く【共助】

自他の生命を尊重し、互いに力を合わせて助け合う「共助」の心を育成することを目的とした指導展開例を「小学校１年～３年」「小学校４年～６年」「中学校・高等学校」の発達段階に応じて作成しています。

5　実践的避難訓練計画例

災害対応能力を育成するための避難訓練計画例を掲載しています。各学校の実態に応じた実践的な避難訓練計画の作成に活用してください。

授業の実施に当たって

本手引は以下のことに配慮して作成しました。授業を実施する際の参考にしてください。

◆学級活動・ﾎｰﾑﾙｰﾑ活動を中心に指導展開例を作成していますが、他の教科や学校行事等と関連させながら、学習が深められるよう「カリキュラム・マネジメントの視点」を示しています。

◆授業展開例では、児童生徒等に「これだけは身に付けさせたいこと」を指導ポイント（◎）として示しています。

◆児童生徒等の実態に応じて授業の「導入」と「まとめ」に以下のような「心のケア」を行う必要があります。

心のケア実践例　**→各指導展開例に「心のケアを受ける」と表示しています。**

【導入】では次のようなことを伝えます。

〇これから自然災害について学習するが、災害について理解し、正しく対処する方法を学ぶことは安心につながること。

〇ドキドキすることがあっても、それは自然なことだから安心してよいこと。ただし、我慢できなくなったら、遠慮なく先生に知らせること。

〇「災害」や「地震」という言葉自体は安全であるため、安心して授業を受けてほしいこと。

【まとめ】では次のようなことを行います。

〇授業の終末にリラクゼーション【くまモンとヨーガ、セルフハグ法、リラックス呼吸法等】を実施し、心身のリラックスを図る。

（参考：熊本県立教育センターＨＰ　防災教育・心のサポート授業）

〇「１時間よく頑張ったね」などねぎらいの言葉をかける。

◆発達段階に応じて、災害発生時には以下のような心理が働き、避難行動等に影響を与えることがあることについて理解させておくことが重要です。

正常性バイアス

異常事態に遭遇したとき、「こんなはずはない」と思ったり、危険が予測される状況でも「自分は大丈夫」と思って、自分にとって都合の悪い情報を無視したり、過小評価してしまう心理的特性を「正常性バイアス」といいます。人は危険を感じると強いストレスを感じます。

しかし、強いストレスはできるだけ避けたいので、無意識のうちに危険を見て見ぬふりをしてしまいます。

多数派同調バイアス

「逃げるほど大変な事態なら、周りの人がきっと大騒ぎするはずだ。でも、みんな静かだから大丈夫だろう」と、大勢の人がいるととりあえず周りに合わせようとする心理的特性を「多数派同調バイアス」と言います。緊急時、人は一人でいると自分で判断して行動を起こします。

しかし、周りに人がいると「みんなでいるから」という安心感で、緊急行動が遅れる傾向にあります。また、自分だけが他の人と違う行動を取りにくくなり、お互いが無意識に牽制しあい、他者の動きに左右されてしまいます。それは、結果として逃げるタイミングを失ったり、せっかく逃げたのに引き返したりすることにもなりかねません。みんながいるから大丈夫なのではなく、みんなでいるから危険にさらされる場合もあります。

◆本手引では「共助」をテーマにした指導展開例を掲載しており、熊本地震でボランティア活動等を行った児童生徒等の姿を多く扱っています。しかし、様々な理由で、ボランティア活動ができなかった児童生徒等もいたことにも配慮する必要があります。